

# 第 1 章

## 学校における教育相談活動に関する実態調査の結果と考察

### 1 実態調査の概要

教育相談に関する実態やニーズ，教職員の意識及び学校における教育相談活動に関する状況を把握し，児童生徒一人一人を生かす教育相談活動の在り方について，より効果的で具体的な方策を探るため，県内から抽出した小学校，中学校，高等学校，盲・聾・養護学校を対象に調査を行った結果，教育相談活動の実施状況，教育相談に関する研修の実施状況及び児童生徒の抱えている悩みやストレスなどが把握できた。

### 2 現状のまとめと課題

児童生徒は様々な悩みを抱えており，ストレス状況下にある一方で，相談相手として保護者や友達が選択され，教師を選択している児童生徒が少ないことが分かった。また，教師が教育相談に関する研修の必要性を感じた研修として校内研修が多いことなどが明らかになった。

これらのことから，児童生徒一人一人を生かす教育相談活動を推進するために，児童生徒理解や児童生徒相互及び児童生徒と教師間の人間関係づくり，心の健康づくり，さらに校内研修の充実や教師間及び保護者との連携，校内体制の確立などが今後の重要な課題であると考えられる。

## 1 実態調査の概要

### (1) 調査の目的

教育相談に関する児童生徒の実態やニーズ，教職員の意識及び学校における教育相談活動に関する実態調査を行い，現状と課題を把握し，児童生徒一人一人を生かす教育相談活動の在り方を探る。

### (2) 調査の対象（対象児童生徒の学年：小学校第5学年，中学校第1学年，高等学校第1学年）

	小学校	中学校	高等学校	盲・聾・養護学校	計
学 校 数	20校	20校	10校	2校	52校
教 員 数	329人	374人	384人	148人	1,235人
児童生徒数	563人	626人	360人	25人	1,574人

### (3) 調査の内容

学 校 用	教育相談活動の実施状況，教育相談に関する研修，校内支援チームについて など
教 員 用	教育相談活動の実施状況，教育相談に関する研修，カウンセリングマインドを生かした授業や学級経営 など
児童生徒用	気になっていること，相談したい相手，教師への相談内容，ストレス など

### (4) 調査の時期・方法

ア 調査の時期：平成16年9月

イ 調査の方法：各学校に調査用紙を送付，回答票（選択式，一部記述式）は無記名。

## 2 実態調査の結果及び分析

### (1) 児童生徒用調査から

以下，盲・聾・養護学校の小・中学部，高等部の分は，それぞれ小・中・高等学校に含めた。

ア この半年間にとても疲れていると感じたことがどれくらいありましたか。

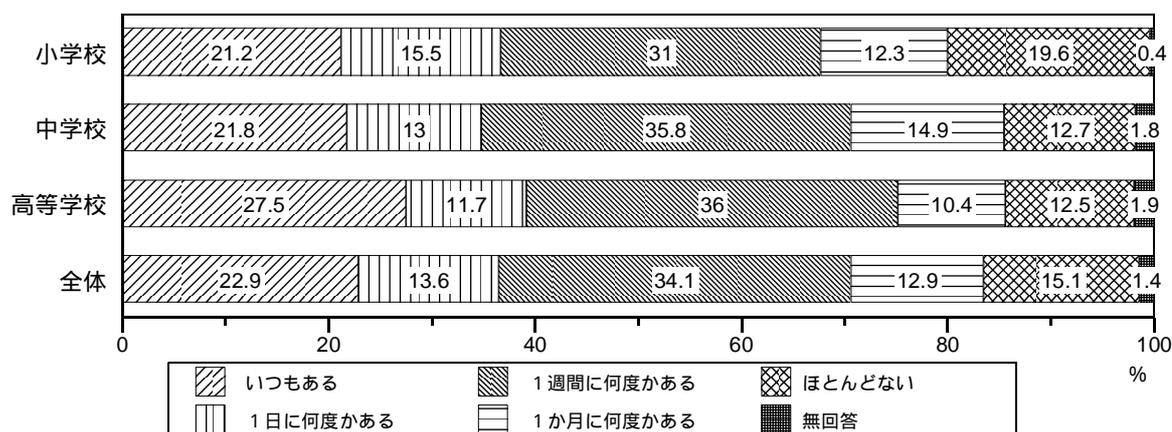


図1 ストレスの頻度

「ストレスを測定する項目」(大野太郎2002)の中で，「いつもある」の割合が高かった項目が「とても疲れていると感じている」である。「いつもある」と答えた児童生徒は高等学校が最も多く約28%，小・中学校も20%を超えている。

「1日に何度かある」，「1週間に何度かある」まで含めると，全体の約71%の児童生徒がと

でも疲れていると感じたことがあると答えている。

この外、「怒りっぽくなる」、「イライラする」という項目も「一週間に何度かある」までを含めると、高等学校では70%を超える生徒が感じている。

**イ 今、気になったり、悩んだりしていることがありますか。** (複数回答)

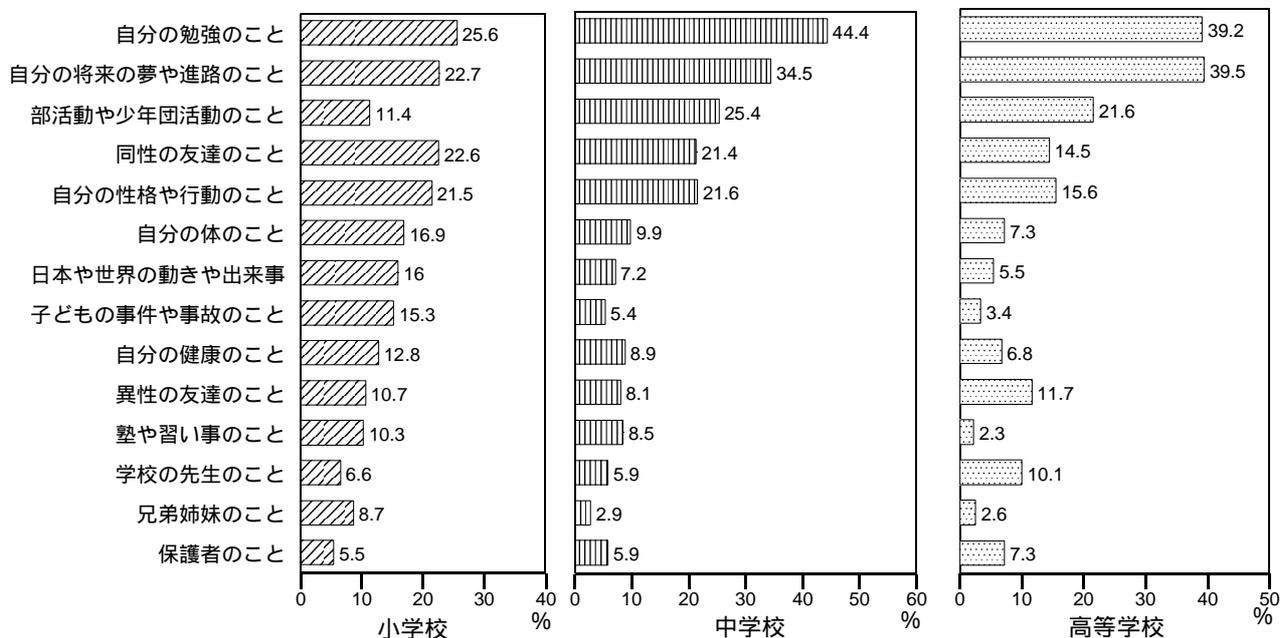


図2 気になったり、悩んだりしていること

校種別に多いものを挙げると、小学校では「自分の勉強のこと」、「自分の将来の夢や進路のこと」、「同性の友達のこと」など、中学校では「自分の勉強のこと」、「自分の将来の夢や進路のこと」、「部活動のこと」など、高等学校では「自分の将来の夢や進路のこと」、「自分の勉強のこと」、「部活動のこと」などである。小学校から中学校、高等学校と学校段階が上がるにつれて「夢や進路」について気になったり、悩んだりする割合が多くなっている。

**ウ 気になっていることや悩みがあったときに、誰に相談しますか。** (複数回答)

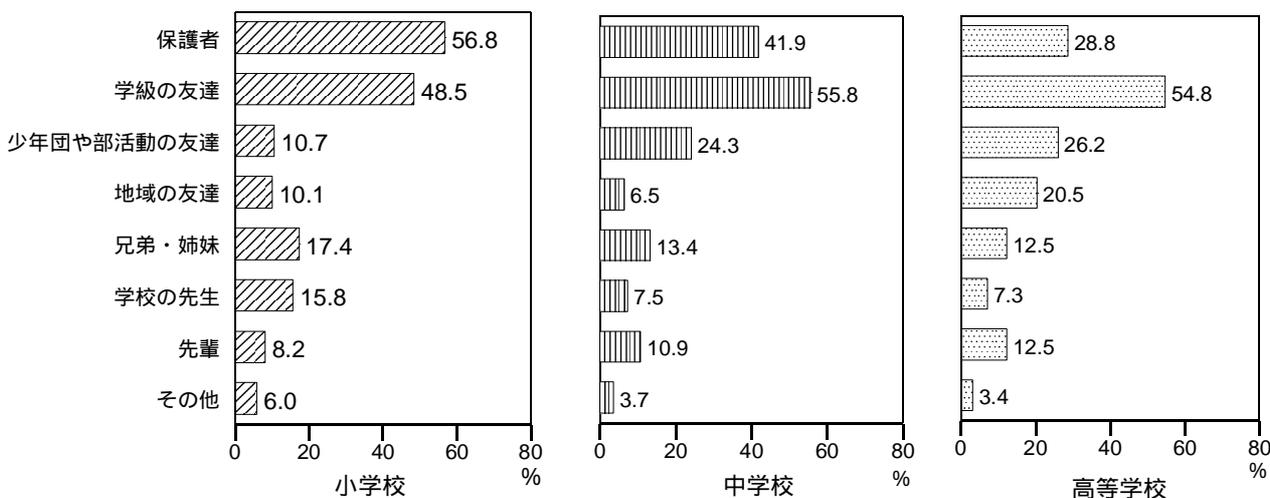


図3 相談相手

学校段階が上がるにつれて「保護者」への相談の割合が減少し、「学級の友達」や「少年団や部活動の友達」の割合が増える傾向にある。高等学校では「地域の友達」も多くなっている。保護者や友達などと比較すると、学校の先生を相談相手として選択している割合は学校段階が上がるにつれて減少している。

**エ 学校の先生に相談するとしたら、どんなことを相談しますか。** (複数回答)

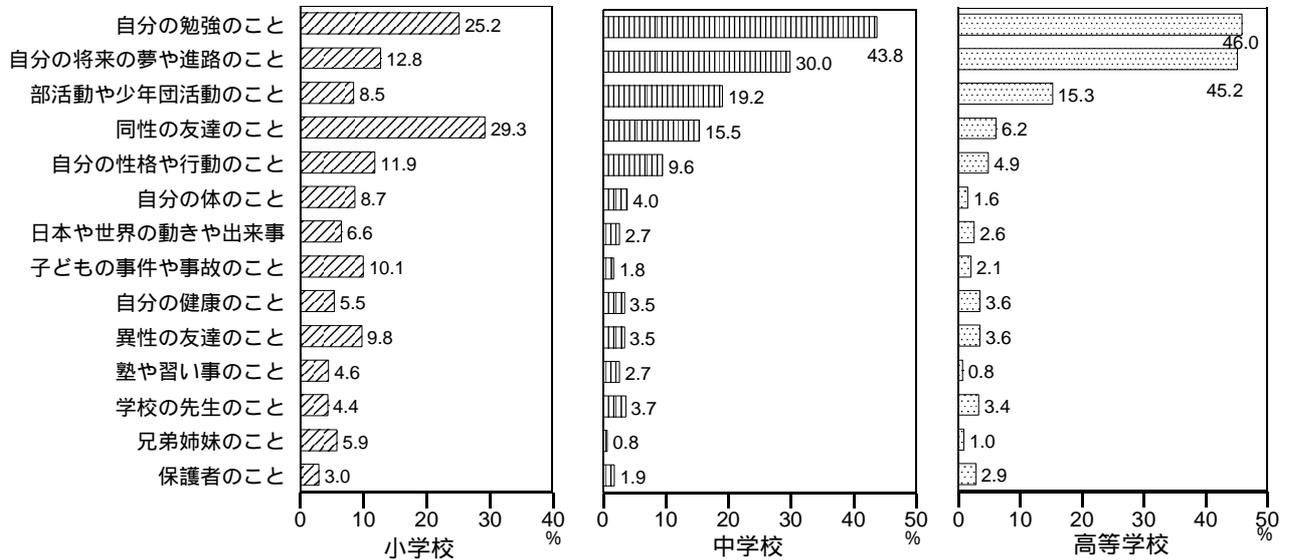


図4 相談内容

学校段階が上がるにつれて、「自分の勉強のこと」、「将来の夢や進路のこと」の割合が高くなっている。逆に、「同性の友達のこと」については学校段階が上がるにつれて、相談する割合が減少している。相談したい内容は、図2の「今、気になったり、悩んだりしていること」とほぼ同じ傾向である。

(2) 教員用調査から

**ア 児童生徒の中で、教育相談が必要であると思う児童生徒はどれですか。** (複数回答)

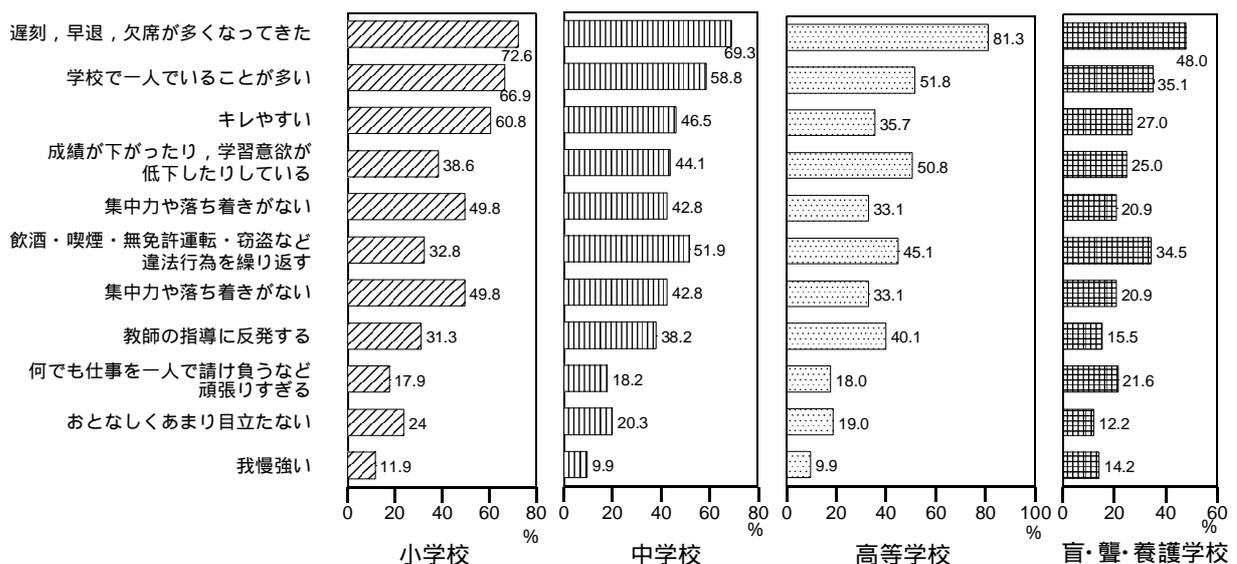


図5 教育相談が必要であると思われる児童生徒

どの校種でも最も多かったのは、「遅刻，早退，欠席が多くなってきた」である。その外に多く選択された項目は「学校で一人であることが多い」，「キレやすい」などである。

どの校種においても「何でも仕事を一人で請け負うなど頑張りすぎる」，「我慢強い」，「おとなしくあまり目立たない」など，他に比べて相談が必要であると思われていない状況がある。

イ 児童生徒や保護者への対応で困った時に，学校内で相談する相手は誰ですか。(複数回答)

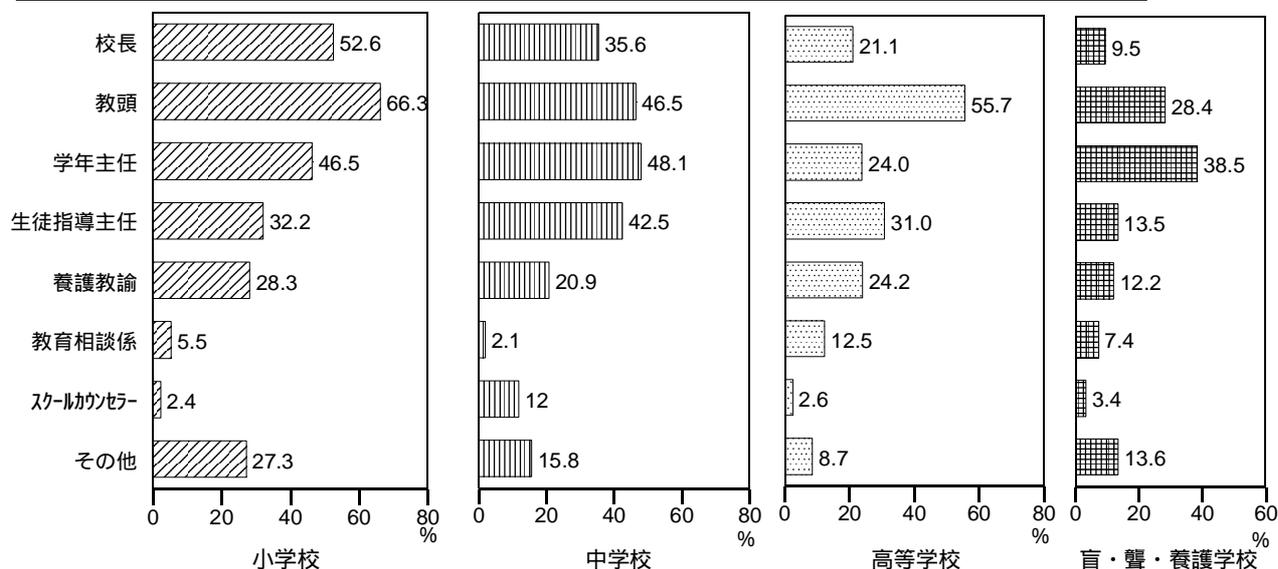


図6 児童生徒や保護者への対応で困った時に相談する相手

小学校では「教頭」，「校長」，中学校では「学年主任」，「教頭」，高等学校では「教頭」，「生徒指導主任」，盲・聾・養護学校では「学年主任」，「教頭(学部主事を含む)」が多くなっている。

ウ 教育相談の必要性を感じたのは，どの研修を通してですか。(複数回答)

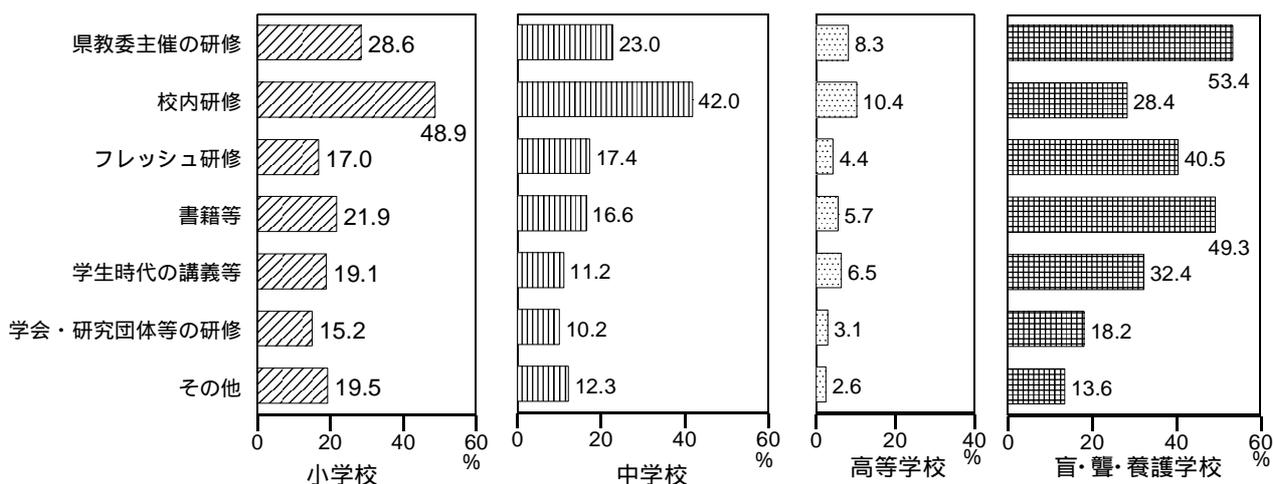


図7 教育相談の必要性を感じた研修等

小・中・高等学校では「校内研修」が多く選択されている。盲・聾・養護学校では「県教育委員会主催の研修」，「書籍等」等が多く選択されている。また，高等学校は，校内研修の必要性を感じている割合が他の校種に比べて低い。

エ 教育相談に関する内容で授業や学級経営等で活用したことがあるものはどれですか。

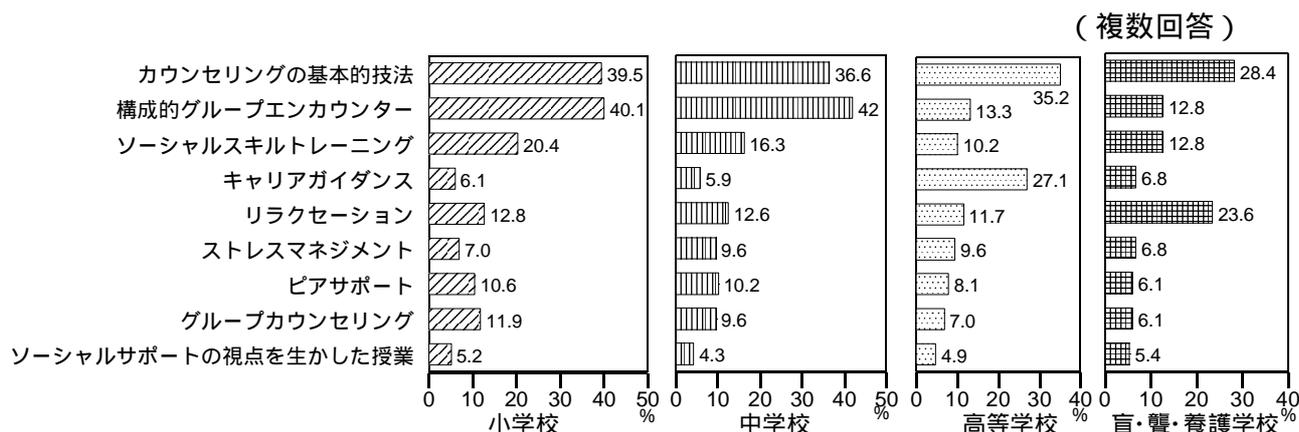


図8 授業や学級経営等で活用したことがある内容

どの校種でも、「カウンセリングの基本的技法」が多く選択されている。その外に多いものは、小・中学校では「構成的グループエンカウンター」等のカウンセリング技法、高等学校では「キャリアガイダンス」、盲・聾・養護学校では「リラクゼーション」となっている。

(3) 学校用調査から

盲・聾・養護学校は調査対象が2校と少数のため高等学校に含めた。

ア 児童生徒を対象とした定期教育相談は、年間何回計画されていますか。

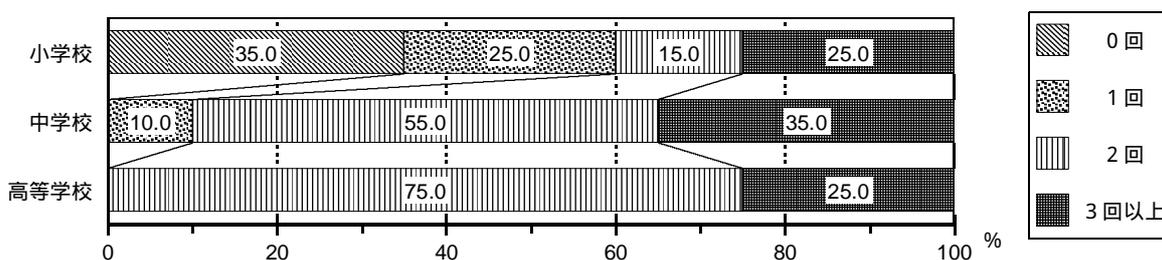


図9 定期教育相談の年間回数

小学校では、7校(35%)が定期教育相談を実施していない。定期教育相談が実施されていない理由としては担任が適宜実施していると答えている。中・高等学校では、年間2回または3回以上定期教育相談を実施している学校がほとんどである。

イ 定期教育相談実施後、担任一人で対応が困難と思われる場合、どのように対応しますか。

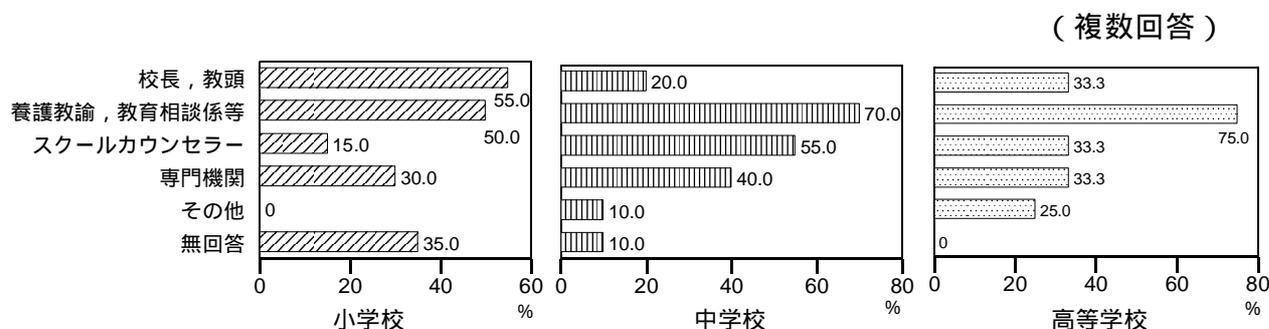


図10 担任一人で対応が困難な場合の対応

児童生徒対象の定期教育相談の結果、担任一人で対応が困難な場合、小学校では「校長・教頭」、  
「養護教諭・教育相談係等」に相談を依頼すると回答した学校が多く、中学校や高等学校でも「養  
護教諭・教育相談係等」に相談を依頼すると回答した学校が多くなっている。また、中学校では、  
「専門機関」、「スクールカウンセラー(相談員)」に相談を依頼すると回答した学校も多かった。

ウ 教育相談に関する校内研修をどのような内容で実施していますか。(複数回答)

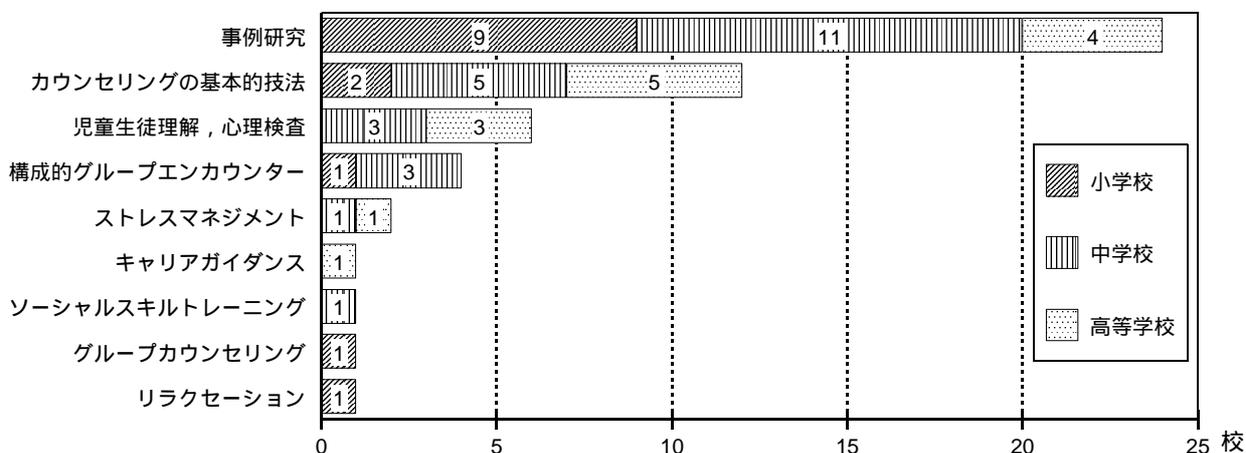


図11 校内研修の内容

教育相談に関する校内研修の内容としては、「事例研究」が一番多く(24校)、小・中学校と比較して高等学校が少ない。次に多いのが、「カウンセリングの基本的技法」(12校)である。

近年有効性があるといわれている「ストレスマネジメント」や「ソーシャルスキルトレーニング」などに関する研修を実施している学校は少数であった。

エ 校内支援チーム等ではどのような活動を行っていますか。(複数回答)

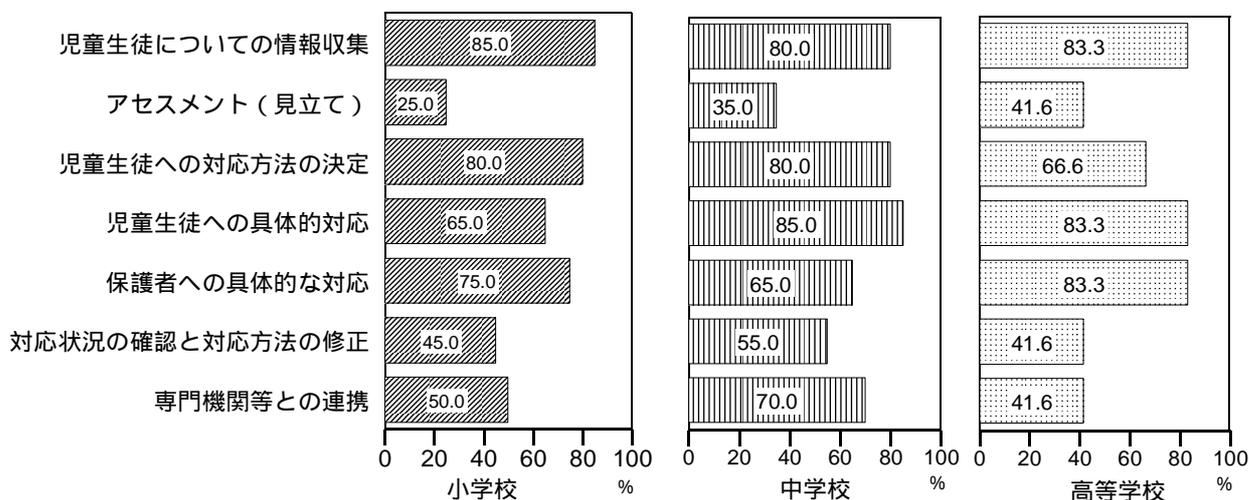


図12 不登校への対応

どの校種とも、「児童生徒についての情報収集」、「児童生徒への対応方法の決定」、「児童生徒への具体的な対応」などが多く選択されている。具体的な対応を進めるには、「アセスメント(見立て)」と「対応状況の確認と対応方法の修正」が重要になるが、選択した学校は各校種とも他の項目に比べて少ない。

オ 教育相談活動を充実させる上で、課題であると思われる内容は何ですか。(複数回答)

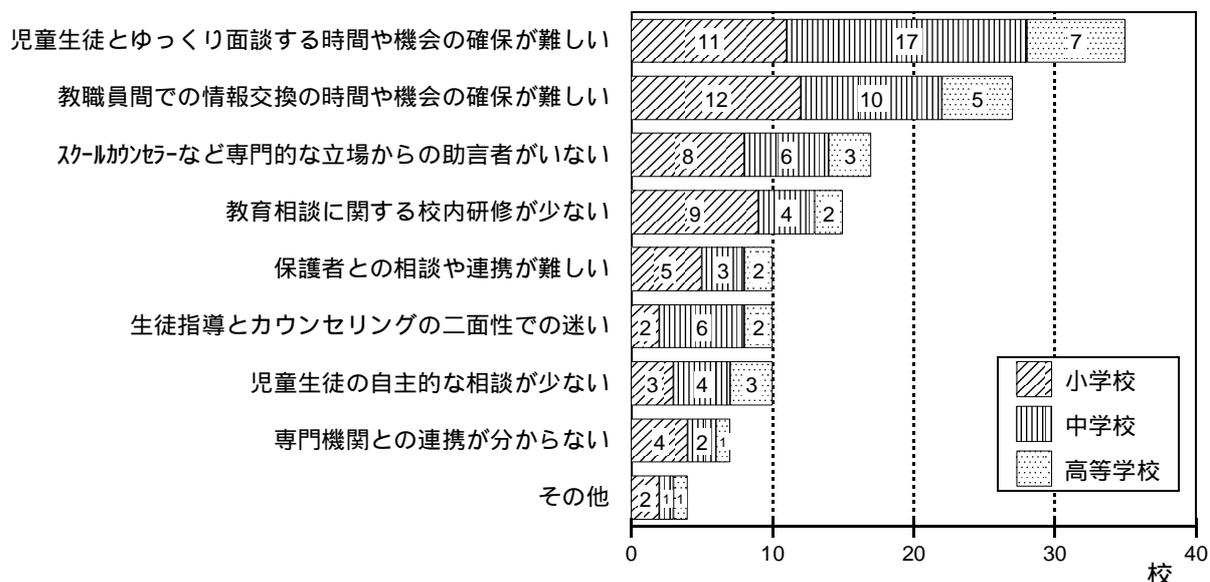


図13 教育相談活動充実のための課題

教育相談活動充実のための課題としては、「児童生徒とゆっくり面談する時間や機会の確保が難しい」、「教職員間での情報交換の時間や機会の確保が難しい」、「スクールカウンセラーなど専門的な立場からの助言者がいない」、「教育相談の校内研修が少ない」などとなっている。

### 3 現状のまとめと課題

#### (1) 現状のまとめ

ストレスを測定する項目の中で、児童生徒は「とても疲れている」、「怒りっぽくなる」、「イライラする」、「キレたことがある」などを強く感じている(図1)。

児童生徒の相談相手として、「学級の友達」、「保護者」、「少年団や部活動の友達」が多く選択され、「学校の先生」は少ない(図3)。

児童生徒の抱える悩みと先生に相談したい悩みはほぼ一致しており、内容としては「自分の勉強のこと」、「自分の将来の夢や進路のこと」、「同性の友達のこと」、「部活動や少年団活動のこと」が多くなっている(図4)。

教育相談が必要であると思っている児童生徒として、「遅刻・早退、欠席が多くなってきた」、「学校で一人であることが多い」、「キレやすい」、「成績が下がったり、学習意欲が低下したりしている」が多く、「何でも仕事を一人で請け負うなど頑張りすぎる」、「我慢強い」、「おとなしくあまり目立たない」は少ない(図5)。

児童生徒対象の定期教育相談は、調査対象校52校中38校が2回以上実施しているが、小学校の7校は1回も実施していない(図9)。

## (2) 課題

### 【課題1】児童生徒理解

教育相談は特定の児童生徒だけを対象にするものでなく、すべての児童生徒を対象にした「いつでも、どこでも、誰でも」行う活動であるという認識の下、児童生徒一人一人のよさや可能性を伸ばしていくためには、多面的で客観的な深い児童生徒理解が必要である。そのため、教師は、カウンセリングマインドをもって教育活動に取り組むとともに、定期教育相談の充実を図る必要がある。

### 【課題2】人間関係づくり

児童生徒が、安心感や向上心をもちながら学校生活を送るためには、教師と児童生徒、児童生徒相互の温かい人間関係が重要である。教師は、そうした温かい人間関係づくりを重視した学級経営に努めるとともに、分かる・できる・楽しい授業を展開することが大切である。併せて人間関係づくりについての理論や方法について理解を深め、これらを教育活動の中で展開していくことが必要である。

### 【課題3】心の健康づくり

児童生徒の多くがストレス状況下にあることから、児童生徒には、自らストレスへの対処法を考え、それを実践していくことが求められる。ストレスと問題行動等との関連性も指摘されており、児童生徒が充実した学校生活を送るためには、心の健康を維持、増進していくことも大切である。そのため教師はストレスやストレスへの対処法について理解を深め、ストレスマネジメント教育の推進を図ることが必要である。

### 【課題4】連携

児童生徒が出す様々なサインを見逃さないためにも、教師間の連携は大切である。また、児童生徒の様々な課題に対して、場合によっては支援チームで対応しなければならないケースもある。効果的な対応を図るためには、管理職のリーダーシップの下、校内体制を確立する必要がある。さらに、様々なストレスの状況下にある児童生徒に対応するためのスクールカウンセラーや保護者等と適切な連携が必要である。

これらの課題を踏まえ、第2章では学校教育に生かす教育相談活動の理論と技法について提示する。また、第3章では児童生徒一人一人を生かす教育相談活動の実践事例について、第4章では教育相談活動の充実を目指した具体的取組、第5章では具体的な教育相談事例を提示する。